

新刊  
紹介

"I love my books as drinkers  
love their wine; The more I  
drink, the more they seem  
divine."

小嶋外弘著（文学部助教）「消費者心理の研究」東京・日本生産性本部、B6判、二八七頁、定価五二〇円。

生産者にとっては、流通過程が掌握できないかぎり、つねに不安がつきまとう。過剰生産にならないか、生産物が時代おくれになっていないか、など流通過程の不可測要因におびやかされる。これは基本的には生産手段の私的所有と生産の社会性との矛盾なのだが、この矛盾を少しでも解決しようとする方向がマーケティングなのである。マーケティングは流通過程をも生産者

の統御の下におくことよって、生産の計画性を実現しようとする技術である。

このマーケティングは近年日本でもさかんになってきたが、消費者心理の側面からの分析は多くはなかった。本書は、マーケティングの心理学的アプローチをこころみたく特色ある書物である。第一部は「消費者心理の考察」、第二部は「ネーミング、パッケージ、広告に関する諸問題」にあたえられている。第一部は心理学の用語が比較的多く使われているが、第二部は、豊富な実例の紹介によつて、面白く読める。

この本は、マーケティング専門家の本というより、消費者が広告の実体を知るために読む方が面白く読めるような気がする。ただし、「消費者心理」がうたつても、それは生産者の側に立つてのものだから、消費者が読む場合は、「読みこみ」が必要だろう。（山本）

笠原芳光著（大学宗教部主事）「現代キリスト教入門―新しい人間の問題―」東京・教文館、新書判一六〇頁、定価二五〇円。

「この本はキリスト教やイエスから問題をはじめるのではなく、人間の問題、社会の問題からはいって、その根拠を聖書のことばを手がかりにして探求し、イエスと出会うことによつて、ふたたび人間や社会に回復されるという構造になっています」（「入門について」の章より）

笠原さんはとくにことわつておられないが、この本は宗教主事としての、学生との対話のなから生みだされたものであろう。そのせいも、たとえば「自然について」の章など多少、思弁的にすぎるところはないかという感じがしないでもなかった。

しかし本書は、すぐれて意欲的である。こんにちまで生きつづけてきたキリスト教には「イエスについての誤解である」といいたくなるようなものがあるが、誤解のなかにも正解が隠れているにちがいないのべ、笠原さんは現代に生きる道を、イエスのなかに再発見しようとしておられる。イエスの十字架の死を贖罪とする考えかたや、世の終りに雲上に現われるといった神話思想はもはや、そのまま現代人には意味

をもたないものとして、それを実存的に受けとりなおそうとしているところに、本書の一つの特色があるのではないかとおも

う。  
また本書は、すでに感じられるように、すぐれて現代的である。とりあつかわれていたテーマは対話、自殺、家庭、政治、疎外、大衆、自由など(ほか七章)であるが、これらの今日の課題のなかで、笠原さんはイエス(キリスト教)に拠点をみいだしながら、人間を論じておられる。いわば人生論風の読みものといったところであろうが、現代に対して十分な説得力をもつものである。(工藤)

西村豁通著「新版・日本の賃金問題」京都・ミネルヴァ書房、B6判二七一頁、定価五八〇円

この両三年、総評傘下の組合を中心とするいわゆる春季賃金闘争Ⅱ春闘をめぐる労使の態度は、組織や態勢に力量を結集し、情勢判断にもとずく、ねばり強かったり、機敏だったりする收拾をはかることに、力が注がれてきた。その前提となり、支えと

なるはずの賃金理論については、漸次、便宜的な借り物で間に合せかねない様相になってきていた。

一方、戦後一貫して、労働運動内部における賃金理論展開の推進力となってきた。最低賃金制論争も、一九五九年、岸内閣が業者間協定を中心とする最低賃金法を強行成立させてからは、労組側のいわゆるこのニセ最賃法の実施の現実直面しながら、どのように最低賃金制確立闘争を組んでゆかかという論議に道を譲った感があつた。

年来の友人、そして、この四月から同志社大学に來た私にとっては、学部こそ遅え、同志社や関西については先輩の、西村豁通(経済学部教授)君が、ミネルヴァ書房から「新版・日本の賃金問題」を出された。

序章・前編・後編・補論の構成。序章は賃金の基礎理論、前編は戦後日本の労資の賃金政策の展開とそれを通じての年功序列型賃金の再形成。後編は一九五九年ぐらいまでの最低賃金の要求と闘争。補論は、同一労働同一賃金論に関する二つの論文。

吉村勸氏との共著「旧版・日本の賃金問題」がおのおの独立の書物となつた一つ。

本書は後編・補論に西村教授の數個の論文を新たに収録している。

一貫して、最低生活保障と同一労働同一賃金との、二つの賃金原則をめぐる。戦後日本の労資の具体的対決の展開をあとづけ、この二原則の正しい理論的把握と適用を志している。舟橋尚道・吉村勸・黒川俊雄の三人の賃金理論家への「学問的友情」と、本書を日本の賃金問題の「みどり多い新理論確立のための触媒となり、その停滞よりの脱出の一礎石」とする希望とが、行間に溢れている。

いわゆる高度成長政策・地域開発を経て、日本の賃金問題は国際的検討の対象となりながら、他方、生産性と結びつけられ、物価抑制のための賃金抑制さえ論ぜられてきている。

本書のような賃金の理論と闘争についての戦後の展開過程を今一度ふりかえり、より正確に基本を把握する必要があるように思われる。

(角田)